誰も取り残されない社会を目指して

世界は今、ダイバーシティ（多様性）を志向し、どのような人も社会から孤立したり、排除されることなく、一人一人が社会の構成員として能力を発揮でき、互いを支え合う「ソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）」に向かっている。今回の特集では、慶應義塾における知見や実践例を通して、これからの協生社会の在り方を考えたい。

慶應義塾 協生環境推進憲章

Charter of the Keio University for Equity, Diversity, and Inclusion

憲章

1 自他の尊厳に等しく敬意を払い、互いの人格を尊重し、協力し合う協生社会の実現を目指します。
2 多様な価値観への理解を深め、自分らしく生きることへの共感と配慮を育む啓発活動を推進します。
3 社会的障壁を取り除くことに努め、個々の選択に応じた生き方を実現できる環境を整備します。

Charter

1. We aim to realize a collaborative society in which people cooperate with each other while equally paying respect to the dignity of oneself and others and giving due regard to the personalities of one another.
2. We will promote developmental activities that foster sympathy and consideration to living a life that is true to oneself while deepening our understanding of diverse values.
3. We will establish an environment in which people can live their lives in accordance with their individually chosen lifestyles while making every effort to remove social barriers.

慶應義塾バリアフリーマップ

義塾を利用されるすべての方に利用しやすい施設を目指して、ユニバーサルデザインの考え方をもとにしたマップを公開しています。

日吉エリア バリアフリーマップ

段差の有無、多目的トイレ、ATM、避難所等について日吉商店街エリアへのアクセスをまとめています。KEIO 2020 projectの塾生が調査・制作。

理工学部が日本のジェンダー問題を考える

KEIO TECHNO-MALL 2021のプレイベントとして配信されたコンテンツ。理工学部教員を中心としたパネラーが、ジェンダー問題を議論しました。

01 「女性のからだ支援～Breezeプロジェクト」について

協生環境推進室では、2021年度から「女性のからだ支援～Breezeプロジェクト」をスタートさせました。この取り組みは、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、塾生の経済状況にも影響が及んでいることを踏まえ、2021年7月に生理用品の無償配付を実施したことがきっかけとなりました。昨今、他大学等でも生理用品の無償配付の取り組みが実施されています。義塾も当初はこの流れに沿った考え方でスタートしました。しかし、配付の際に併せて実施した塾生アンケートの結果、単に生活不安だけではなく、女子学生の皆さんが学生生活を送っていく中でさまざまな不安や問題を抱えていることが明らかになりました。この結果を受け、単に生理用品を一度配付すれば良いというものではなく、女子学生の皆さんをトータルにサポートすべく「女性のからだ支援～Breezeプロジェクト」と名付けた協生環境推進室の取り組みの一つとして継続的に実施することを決定しました。これらの活動の継続により、塾生の皆さんの「からだのメンテナンス支援を通じたウェルネスの促進」を、多角的かつ積極的に進めていきたいと考えています。

なお、先に触れた通り、この活動は塾生を対象にしたアンケートの結果が起点となっています。今後の取り組みの継続には塾生の皆さんの「声」が何よりも大切だと考えており、2022年度早々にアンケートを実施したいと考えています。塾生の皆さんの積極的な回答をお待ちしています。

協生環境推進室では、この取り組みのほか、「協生環境推進憲章」の精神に則り、協生環境のさらなる充実に向けて寄与したいと考えています。

5つの活動の柱

1. OiTr（個室トイレに生理用ナプキンを常備し無料で提供するサービス）の導入（2022年1月現在で6つのキャンパス全て、合計71台を設置済み、増設を準備中）
2. 生理用品の無償配付（年間に複数回の配付を今後も継続する）
3. 女性のからだ・男性のからだ相談室（「自分のからだとの付き合い方」に焦点を当てた専門医による相談窓口を保健管理センターに設置）
4. 「女性のからだ支援」講演会・座談会の開催（「自分のからだとの付き合い方」などをテーマに専門医による講演会の開催、塾生・教職員が専門医を囲む形での座談会を開催）
5. 「女性のからだ支援」アンケートの実施

OiTrが設置されたトイレ

※協生環境推進室「女性のからだ支援～Breezeプロジェクト」Webサイト https://www.diversity.keio.ac.jp/breeze/breeze.html

02

今すぐにでも取り組むべき「共生」という課題

法学部政治学科　教授
塩原良和（しおばらよしかず）

「共生」のあいまいさが差別や不平等を見えにくくする

私の専門分野は大きく言えば「社会変動論」。近現代の社会構造の変化に伴う人々の価値観や文化、政治・経済の変容を、マクロ&グローバルな視点から考察する社会学の一分野です。その中でも国境を越える人々の移動と、それに伴い多文化化する社会について、主に日本とオーストラリアをフィールドに理論と実証の両面から研究を進めてきました。

近年、「多文化共生」という言葉がクローズアップされるようになりました。私はこの「共生」という言葉が社会でどのように使われ、それがどのような帰結をもたらすのかという問題意識をもっています。

「共生」という日本語はもともと、異なる種類の生物が「相互関係を持ちながら同所的に生活する現象」を表す生物学の用語として知られていました。例えばクマノミとイソギンチャクの「共生」関係といったことです。それが1970年代頃から「自然との共生」「社会的弱者との共生」などと人文社会科学分野でも使われるようになり、2000年代に総務省によって「多文化共生」が行政用語として広く使われるようになりました。

「多文化共生」。一見、文句の付けようもない言葉ですが、日本に住む外国にルーツをもつ人々にとって良いことばかりではありません。国や自治体の「多文化共生」施策には、そうした人々に言語や文化の面で"日本人"との同化を促すパターナリズムに陥っているものもあります。「多文化共生」に限らず「共生」という言葉のあいまいさが、差別や不平等、不公正の存在を見えにくくしてしまうこともあります。

現場で学ぶフィールドワークで共生社会の課題に取り組む

もちろんそうした問題点を認識し、より望ましい「共生」を進めようと取り組んでいるNPOや自治体もあります。私のゼミでは、ゼミ生全員が神奈川県川崎市や横浜市での「共生」に向けた取り組みの現場でフィールドワークを体験します。3～4年次の2年間、週1回のペースでNPOの人々と共

に、海外にルーツを持つ若者や生活保護受給家庭の若者と関わり、支援活動に取り組みます。文化やアイデンティティの差異と貧困（さらに言えばジェンダーやセクシュアリティ）の問題は社会の中で複雑に絡み合っており、その"交差性"を現場でしっかり経験してほしいとゼミ生には期待しています。

ゼミ生はフィールドでの体験を「フィールドノーツ」としてまとめ、ゼミ専用Facebookページで全員が情報を共有。フィールド体験をベースに関連文献をあたりながら、現場の映像なども交えたプレゼンテーションを制作し発表します。また、卒業論文の代わりにフィールドノーツをまとめたエスノグラフィ（民族誌）を提出することもできるコースを用意しました。

前述した通り、「多文化共生」を含め、日本の「共生」に向けた取り組みはまだ発展途上です。海外ルーツの人々や貧困層、性的マイノリティの人々が不公正で生きにくい状況に置かれている現状がある限り、それは社会全体が今すぐ取り組むべき課題です。ゼミ生たちのような若い世代は、中高年世代と比べて多様で寛容な価値観を持っているので、彼らが社会の中枢となれば「共生」も必然的に進むだろうという見方もあります。しかしそれは虫が良すぎる考えだと私は思います。「共生」は喫緊の社会課題なのですから、現在の社会を動かしている私を含む大人が責任を持って、差別や貧困、抑圧や排除などの問題に取り組み、若い世代が希望を持ち得る社会をつくるべきでしょう。私の研究と学生たちへの教育がその一助となることを願っています。

卒業後も「現場」に関わっていきたい

法学部政治学科4年（取材時）
小林夏穂（こばやしかほ）君

私のフィールドワークの現場は川崎市の県立高校。海外にルーツを持つ生徒への日本語教育のサポートを中心に、受験勉強なども教えていました。生徒たち一人一人がしっかりと、自分の将来を考えていることに感心させられる一方、その夢をかなえるためには、変えるべきことが社会には多くあるという現実にも直面しました。4月から新聞社に勤務しますが、社会人になってからも仕事やボランティアを通し、多文化共生の現場に携わっていきたいです。

言葉の裏側にある本質を見極める目を

法学部政治学科4年（取材時）
小林優（こばやしゆう）君

塩原先生の「多様性」や「共生」に関するお話に、何回ハッとさせられたことでしょう。多様性の大切さを分かっているつもりでも、実は自分で価値観が違う考え方を無意識にシャットアウトしていることに気付かされたり……問題の本質を見極めることの大切さを教えていただきました。塩原ゼミでは生活保護受給家庭の中学生に勉強を教えるボランティアを体験。しっかりコミュニケーションを図り、彼らの言葉に隠されている気持ちを見逃さないよう心がけました。

03

皆のためになる障害者の社会参加のススメ

総合政策学部　准教授
塩田琴美（しおたことみ）

私は理学療法士の資格を持ち、リハビリテーション科学を専門とした研究・教育活動を行っています。加えて、障害のある当事者と共に障害者の生活・就労支援とスポーツ促進に向けた団体を設立し、障害者の社会参加に向けた事業を展開しています。

いつも初回の授業では学生たちに、「社会がダイバーシティ・インクルージョンであると、どのようなメリットがあるのだろうか」、そして、「障害者の社会参加の促進をする意義や効果は何だろうか」と問いかけます。

日本では、障害者差別解消法の制定や障害者の法定雇用率の引き上げなどもあり、さまざまな面から障害者の社会参加が促されています。しかし、現況では障害者の社会参加の効果の側面が語られることは少なく、数値目標の達成がゴールとなってしまうケースも多くあります。そのような状況下では、障害者の特性を生かした役割が与えられず、真の障害者の社会参加促進や本質的な課題解決に至っていないように感じています。

私自身は障害者の方と接すると、普段とは異なる視点をもつことができ、結果として多くの学びが得られると感じています。例えば、皆さんが目を閉じて、この文章の続きを読もうとしただけでも、普段とは違う気づきや課題があることに気がつくでしょう。障害者の方の社会参加促進は、よく「障害者のため」と考えられがちですが、多様なバックグラウンドをもつ人と交流する中で生まれる気づきやアイデアは、社会をより良くするための原動力になると考えています。現に、視覚障害者のために活用されていた音声入力がスマートフォンには当たり前の機能として装備されていることや、障害者の抱える課題から生まれたトイレの温水洗浄便座は人々の快適さの向上につながるなど、多くの人々の生活の質の向上にも結びつくのです。

私の研究会では、学生たちに社会に存在している課題により多くの気づきを得てほしいことから、障害のある当事者と共に、公共交通機関のバリアフリー促進、障害者雇用促進のためのマニュアル作り、障害者スポーツイベントの開催や自分らしくデザインできるキャンパス・職場環境作りなどのプロジェクトを行っています。障害者の社会参加など社会課題の解決には、まずは人々がその課題を認識することが重要だと考えています。そして、若い世代が多様な人と交流し創造的に課題解決につなげることで、障害者のみならず自分の生活をより豊かにし、より良い社会へ導いてほしいと考えています。

研究会でのブラインドウォーク体験の様子

Column

いまさらながら「独立自尊」を考える

歌人・作家・実業家
2019年 経済学研究科博士課程単位取得退学
小佐野（おさの） 彈（だん）

慶應義塾で学んでいると、福澤諭吉先生の遺したさまざまな言葉を耳にする。とりわけ多く接するのが「独立自尊」だろう。かくいう僕も幼稚舎から博士課程に至るまで、耳にタコができるほど「独立自尊」という言葉を聞かされて来た。

ところが先日、義塾で学んだ経験のある性的マイノリティの知人から「『独立自尊』なんか、所詮は自己責任論だろ」と吐き捨てるように言われた。精神障害の当事者でもある彼は、さらにつけくわえた。

「俺みたいな社会的に無力な存在は、独立自尊したくてもできないよ」

彼のひと言をきっかけに僕は、いまさらながら「独立自尊」の意味について考えてみた。

幼稚舎時代の僕は、「変なヤツ」とか「クレイジー」と言われていた。中等部に上がり、自分が同性愛者だと気がついた。スポーツに打ち込む典型的な「慶應ボーイ」に僕はなれなかったし、彼らと馴染むこともできなかった。多様な出自の塾生が多い湘南藤沢高等部に進学してからも、グループらしいグループには属せなかった。大学に入ってから性的指向を隠さなくなったけれど、急な環境の変化もあって、結局心を病んだ。

とにもかくにも二十六年にわたる塾生生活の大半を、僕は「変なヤツ」として過ごした。

福澤は『学問のすゝめ』で、「一身独立して一国独立す」と言っている。

封建制下において人は、必ず誰か（あるいは何か）に隷従していた。制度や慣習は動かし難く、人々は生まれ持った身分を所与として、決められた人生を生きるほかなかった。逆に言えば、封建制下の人は自分の「運命」を呪いさえすれば済んだ。自分の人生に起こる幸不幸や理不尽は、仕方がないと諦めればよかった。隷従している以上、すべては上様次第だし、自分ではどうしようもない他人事なんだから――。そのような封建制を徹底的に批判する中で福澤が説いたのが「一身の独立」であり、「独立自尊」だ。近代市民社会において人間は、何者（あるいは何物）にも隷従してはならない。無批判に何かを盲信してはならない。世の中の「当たり前」を疑い、常に科学的かつ批判的な視角を持たねばならない。世の中を支配する「空気」に惑わされず、自分の人生を生きなければならない。独立している以上、すべては自分事だ。「独立した個人」が、自分の頭で考え、自分も他人も幸せになれる社会の先導者になるのだ――。福澤の言う「独立自尊」とは概ねこういうことだと思う。

つまり「独立自尊」とは自己責任論ではなく、自由意志を持つ独立した個人が、自分も他者も尊重しながら生きる、多様性社会の人間類型を説いているのだとわかる。

塾生時代の僕は、案外「めちゃめちゃ独立自尊」していたのかもしれない。

そして、あなたも安心してほしい。慶應義塾で学ぶあなたがいま、周囲に馴染めず苦しんでいるのだとしたら、あなたこそが「独立自尊」の人なのだから。